

日韓映像文化から見る「孤独死」と資本主義社会

イ・ヒャンジン(李香鎮)

立教大学

- 資本主義社会の余剰人間と新自由主義
- 独りで死を迎える高齢者、女性の物語
 - ポスト家族時代における「孤独死」と資本主義社会
 - 『プラン 75』(2022)、『バックカス・レディ』(2016)と『イカゲーム』(2019)
- 流れ
 - イントロダクション:日本と韓国の映画・ドラマにおける高齢者の「孤独死」
 - 高齢化社会と新自由主義の日本と韓国:高齢者、特に女性の財政的安全とケア・ワークの経験
 - 孤独死の文化的認識とスクリーン・イメージ
 - 日本と韓国の映像文化における高齢者の死の探求:伝統的家族生活への郷愁と独りで死ぬことへの恐怖
 - 資本主義社会への移行と進化
 - 産業化と都市化による家父長制社会システムの終焉
 - 国家の出産・家族政策
 - 高齢者人口の増加、経済対策のための人口抑制、国家の社会的弱者に対する支援と負担
 - 日本と韓国における死の文化認識:家族と儒教
 - 韓国:新しい家族の在り方、先祖祭祀、親孝行

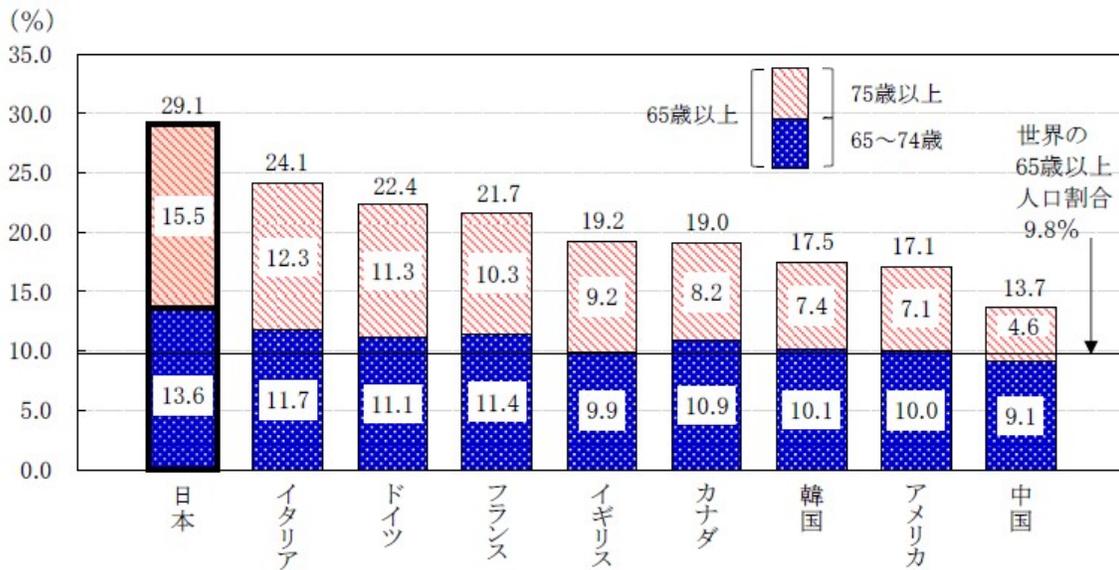
- 日本: 死の美学、家父長制社会の儀式、忠誠心
- 自殺の民間伝承: 姥捨て山と高麗葬: 犠牲になる母という模範、長男の視点、生殖能力と生殖能力の管理
- 『プラン75』、『バッカス・レディ』と『イカゲーム』のテキスト分析
 - 社会的無関心と偏見「孤独死」への批判と考察
- 結論: ポスト家族的家族 (post-familial families) の時代における孤独死に向けて
 - 新自由主義は高齢者、特に女性の負担を増大させること

1. イントロダクション: 孤独死の社会的イメージ: スクリーン・カルチャー

- 孤独死 (Kodokushi) or 고독사 (Kodoksha)
 - 日本と韓国での急速な高齢化
 - 遺品整理者・死後清掃員
 - 一人暮らし: 看取られない死と引き取り手のない死者
 - 老年、貧困、一人暮らし: 高齢者に対する偏見
 - 効率的な労働力として満期となった余剰人間の社会的支援と国家的負担
 - ポスト家族的家族の時代の社会規範
- 『プラン 75』、『バッカス・レディ』と『イカゲーム』における高齢者の孤独死
 - 地域社会の人々の文化的認識に基づいた感情的かつイデオロギー的な関与
 - 自宅で孤独に尊厳をもって死ぬ
 - 恐怖: 重要な瞬間を逃すこと、または孤独そのもの、遺体が発見されないこと

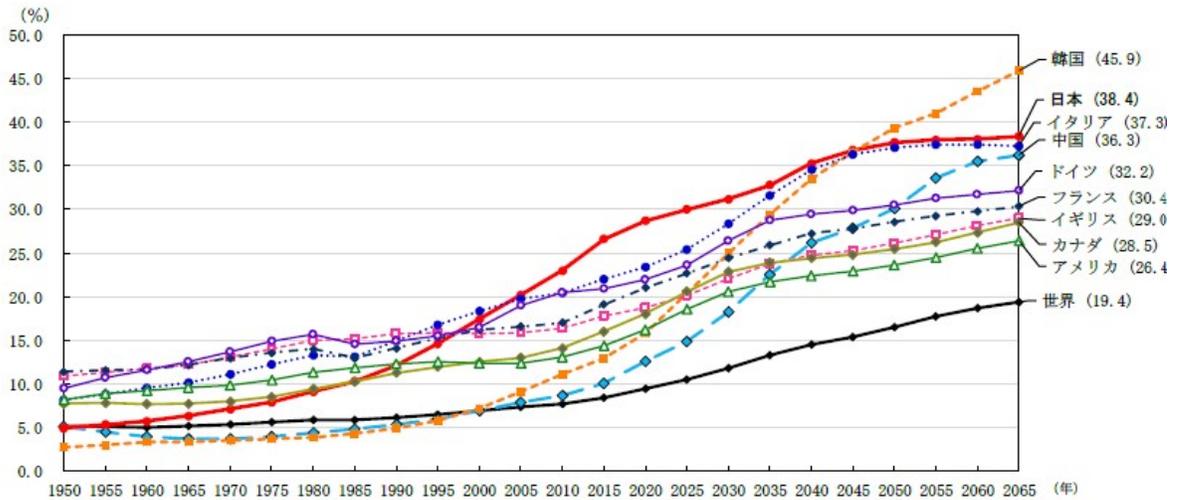
- 死の新しい形態: 自殺と安楽死
- 家と家族の重要性: 引き取り手のない死者に関する批判的議論、規範的判断と非難
- 社会的殺人としての孤独死
- 「望ましい」死に方を選ぶ権利
 - 女性の孤独死

図2 主要国における高齢者人口の割合の比較（2022年）



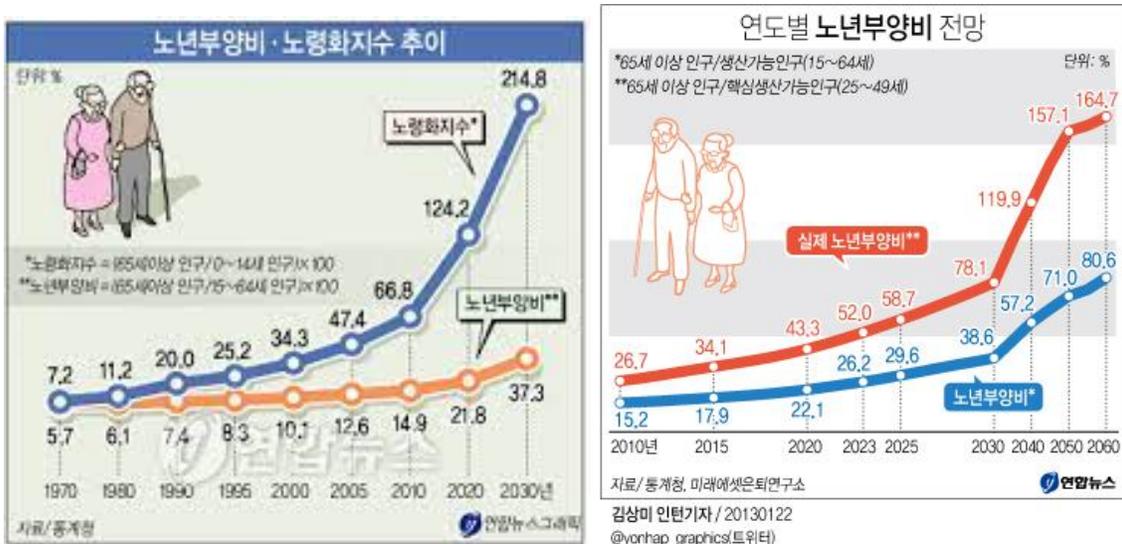
資料：日本の値は、「人口推計」の2022年9月15日現在
 他国の値は、*World Population Prospects: The 2022 Revision* (United Nations) における将来推計から、2022年7月1日現在の推計値

図3 主要国における高齢者人口の割合の推移（1950年～2065年）



資料：日本の値は、2020年までは「国勢調査」の10月1日現在、2025年以降は「日本の将来推計人口（平成29年推計）」出生（中位）死亡（中位）推計（国立社会保障・人口問題研究所）の各年10月1日現在の推計値
 他国の値は、World Population Prospects: The 2022 Revision (United Nations) 各年7月1日現在の推計値

“冷酷な資本主義の下でシルバー世代のための国はない”



2. 日本と韓国の映像文化における死の探求：資本主義と伝統的な家族生活の崩壊

- 日本: 黒澤明『生きる』(1952), 今村昌平『楢山節考』(1983), 伊丹十三『お葬式』(1984)

- 韓国: キム・ギヨン『高麗葬』(1963)、パク・チョルス『学生府君神位』(1996)、イム・グォンテク『祝祭』(1996)
 - 貧困と人口管理: 資源の枯渇と分配、資本主義への移行
 - 前近代社会: 受胎調節(出生率管理)
 - 現代社会: 高齢化社会、家族生活の崩壊、未婚人口の増加、少子化
- 日本と韓国のファミリードラマにおける死の探求: 文化的参照
 - 母と娘の犠牲的な死: ジェンダー化された規範
 - 家父長制社会: 主への忠誠 vs. **親孝行**
- 『姥捨月』(月岡芳年『月百姿』)



- 韓国映画における高齢者の孤独死: 戦争、貧困、そして男らしさ
 - 貞操観念による拘束、『烈女門』(シン・サンオク、1962)
 - 犠牲になる母と孤独死、『高麗葬』(キム・ギヨン、1963)
 - 1950-53: 朝鮮戦争
 - 1950s: ベビーブーム

- 1960s: 出生率政策
 - 大家族の解体
 - 都市化
 - 高度成長期
 - 家父長の死
 - 資本主義社会と家父長の死、『学生府君神位』(パク・チョルス、1996)と長男の『祝祭』(イム・グォンテク、1996)
 - 日本映画の生(死)の探求と家族生活の崩壊
 - 『生きる』(黒澤明、1952)、『東京物語』(小津安二郎、1953)
 - 犠牲となる母たちと孤独死
 - 『檜山節考』(木下恵介、1958)、(今村昌平、1983)
 - 家長の死: 性欲と食欲、そして長寿に対する願いの風刺
 - 『お葬式』(伊丹十三、1983)
 - 万引き家族(是枝裕和、2019)
 - 孤独死と選んだ家族の物語:
 - : 死後清掃作業員、高齢者の命を奪ったのは「殺人」ではなく「救い」を主張する介護士、そして、高齢者の福祉年金を盗む犯罪者達
 - 『ムーブ・トゥ・ヘブン: 私は遺品整理士です』(2019): アスペルガー症候群をもつグル(タン・ジュンサン)と元受刑者の叔父サング(イ・ジェフン)は、グルの父親の突然の死をきっかけに初めて対面する。
 - 日本と韓国における死の文化的認識
 - 韓国: 家族の問題としての死、家族への祝福
 - 考終命(Kojongmyeong)、「天から与えられた人生を楽しんだ後の安らかな死」
 - 日本: 儀式としての死の美学, 決定論的見方
 - 上野千鶴子、『おひとりさまの老後』(2007)
 - 社会的偏見: 高齢、貧困、一人暮らし

3. テキストの分析

- 『プラン75』、『バックス・レディ』と『イカゲーム』
- 映像文化: 高齢者の死に対する社会的想像の意義と考察
 - 感情的コミュニケーションの手段としての映画やドラマの役割
- 感情とイデオロギー
 - 感情的: ベタつく、悪臭、腐敗、嘔吐
 - イデオロギー的: 惨め、哀れ、道徳的判断
- 生きる権利、看取られない死を選ぶ権利
 - 視点の交差
 - 老いる病めることは善悪だけでは捉えきれない
-
- 『プラン75』
 - 障がい者施設で起きた大量殺人事件
 - 2016年、神奈川県相模原市の障がい者施設で起きた元職員による無差別大量殺人事件
 - 19人が死亡、26人が重軽傷を負った
 - 視点
 - 共感, 代替的な家族関係
 - 清掃員と資源のリサイクル、短期移住労働者の視点
 - 生きることを選ぶ権利
 - 結論: 家でひとりで死ぬこと
- 『バックス・レディ』
 - 選んだ家族と自殺の助力者
 - 尊厳死: 自らの死を選択する
 - 性的欲望と死に向かう準備
 - 自殺のほう助
 - 殺人と自殺の助力: 犯罪?

- 結論:「孤独死」についての前向きな社会的言説を導くために
 - 孤独死に対する社会的認識に異議を唱える
 - 誰が遺体を請求できるのか
 - 死についての気軽な会話それ自体?
 - ポストファミリアル家族時代における選択された家族の意味
- 『イカゲーム』(2019) Netflix オリジナル韓国ドラマ
 - 新自由主義のグローバル化と階級不平等の深化、社会的弱者の生存
 - 余剰人間、社会的生活の後期資本主義的論理
 - 三つの孤独死:新自由主義に基づいて余剰人間を排除するプロジェクトの開発者と対象者の死
 - 階級、社会的弱者の死と生
 - 結論:病院での孤独死

4. 終わりに

- ポストファミリアル家族(post-familial families)の時代における孤独死
- 新自由主義は高齢者、特に女性の負担を増大させること
- おばあちゃんの家(イ・ジョンヒョン、2002)